

近代英語協会第 33 回大会

—— シンポジウム・研究発表・講演 ——

日時：2016年6月25日（土）

会場：安田女子大学5号館2階5206教室

広島県広島市安佐南区安東6-13-1

TEL 082-878-8111（代表）

近代英語協会事務局分室

〒722-8506 広島県尾道市久山田町 1600-2

尾道市立大学芸術文化学部 平山研究室内

メールアドレス：hirayama@onomichi-u.ac.jp

協会ホームページ <http://www.modernenglish.jp/index.html>

（電話：0848-22-8311（代表） 会費振込口座 00810-9-5821）

「近代英語研究における辞書・データの使い方」

司会： 中尾 佳行 (福山大学教授)
講師： 和田 章 (山口大学名誉教授)
講師： 堀 正広 (熊本学園大学教授)
講師： 滝沢 直宏 (立命館大学教授)

シンポジウム趣意書

福山大学教授 中尾 佳行

コンピュータの登場で辞書・データの情報は量的・質的に大きく広げられ、その使い方は今新たな局面を迎えている。コンピュータ導入前の辞書・データはどのような有用性があり、他方、限界点があるとすればそれは何か。コンピュータ導入後において、限界点はどのように改善され、研究幅を広げたか、また更なる開発の可能性とは何か。辞書・データは、英語研究の基本・出発点であるだけに、その使い方を今改めて問い直してみる価値があるように思える。ここでは「辞書・データ」を大きく三つに意義づけている。一つ目は辞書、二つ目はデータ、三つ目は辞書とデータを融合させた使い方である。

3人の講師は、英語史的、文体論的、英語学的な観点を共有しながら、同時に各々が辞書・データをどのように生かして使っているか、その可能性を探求する。和田講師は、Johnsonの辞書(1755)が出るまでの辞書・データを主として扱い、その見出し語の選定あるいはその定義の意義深さを検討する。堀講師は、紙媒体のOED、CD-ROM版、Online版、更には独自に開発されているレキシコンを相対化しながら、特に文体研究への有効性を探る。滝沢講師は、アメリカ英語の歴史コーパス(COHA)を使って、-ly副詞の通時的変化を記述・説明する。

三者三様の辞書・データの使い方ではあるが、狭く講師だけの研究に留まるのではなく、フロアの皆さまの研究に対しても、転移性のあることを希望している。

「初期の英語辞書(1604-1721)—難語辞書から一般語辞書へ—」

山口大学名誉教授 和田 章

英語辞書は、難解語(hard English words)を平易な英語(plain English words)で解説する Cawdrey (1604)から始まり、内容を充実させつつ Bullokar (1616), Cockeram (1626^{2nd ed.}), Blount (1656)、Phillips (1658)、Coles (1676)へと続き、18世紀の Kersey (1702)、Bailey (1721)では、難解語に加え一般語(common words)にも記述を広げたものの、一般語の記述はまだ手薄である。

発表ではこれら辞書 8 点を中心に、補足辞書として Dyche-Pardon (1754^{8th ed.})、Johnson (1755) & Todd' s Johnson (1818)、Webster (1828)及び OED その他を援用し、初期の辞書の時代を反映する意味(e.g. whale=a huge sea-fish; center=the earth; science=knowledge, or skill)と、二つ目に、17 世紀の辞書で四季語のうち autumn=harvest のみが難解語であることを題目とする。

「言語・文体研究への貢献—辞書、CD-ROM、Online、そして Dickens Lexicon Digital—」

熊本学園大学教授 堀 正 広

本発表では、紙媒体の辞書である *The Oxford English Dictionary* (OED)から CD-ROM 版、Online 版、そして現在作成中の *The Dickens Lexicon Digital* (DLD)までを利用した言語・文体研究に関して、各媒体による研究の有用性と限界、そして可能性を検討していく。

まず、紙媒体の辞書である、*Shorter Oxford English Dictionary*、*A Chronological English Dictionary*、OED を利用した Shakespeare の *The Sonnets* における初例研究を見ていく。次に、Dickens の初例研究に関して、紙媒体の OED と CD-ROM 版を比較し、OED Online 版の有用性と問題点を論じる。最後に、故山本忠雄博士のカードを基にして、さらに多機能検索エンジンを搭載した DLD を使った研究を紹介したい。

文学作品における言語文体研究は、時代のテクノロジーの発展と共に変化していることを具体的な研究で示しながら、同時に時代の変化においても変わらないもの、あるいは変わるべきではないものについて述べていきたい。

「-ly 副詞の盛衰—1810 年から 2009 年までの通時的変化の記述—」

立命館大学教授 滝 沢 直 宏

本発表では、*Corpus of Historical American English* の full text (以下、COHA と略称) を用いて、1810 年から 2009 年までの -ly 副詞の盛衰について調査する方法を紹介し、一部の -ly 副詞についてその盛衰の原因を探る。

COHA は、種々の問題・限界はあるものの、ちょうど 200 年にわたって 1 年刻みでデータが得られる巨大なコーパスであるという点で貴重である。200 の約数は、1、2、4、5、8、10、20、25、40、50、100、200 であるから、データのまとめ方は 12 通りあることになる。まずは 1 年単位でデータを整理し、それを 2 年単位、4 年単位、5 年単位、8 年単位のように 12 通りでデータを整理する。抽出集計には研究協力者が作成したプログラムを利用し、-ly 副詞の使用実態をマクロ的・ミクロ的に見る。

その過程で、近年富にその使用が増している副詞や、逆にこの 200 年の間にめっきり使用されなくなった副詞の同定が可能となる。盛衰に関して、同じ傾向を示す副詞のグループ化を試みると共に、盛衰の背後にある要因について語法分析的な観点から考察する。最後に辞書記述との関連に触れる。

■ 研究発表 第一部 13:15—15:15

司 会 日本大学教授 保 坂 道 雄

1. 「英語史における動詞群の優勢語順の量的変化について」

筑波大学大学院生 長 田 詳 平

Nagata (2016) では、古英語 (OE) で観察される、S-O-V- V_{fin} (Verb-Final (VF))、S-O- V_{fin} -V (Verb Raising (VR))、S- V_{fin} -O-V (Verb Projection Raising (VPR)) の語順を、OE が head-initial であり、OE の法助動詞 (Mod) が語彙動詞であったという仮定の下、Mod の補部に TP を取る構造 ($[_{TP} \text{Mod}+T \ [_{VP} \ t_{Mod} \ [TP]]]$) では VR 語順が、vP を取る構造 ($[_{TP} \text{Mod}+T \ [_{VP} \ t_{Mod} \ [vP]]]$) では VF 語順が派生され、VPR 語順はどちらの構造からも派生されうることを見事に示した。後者の構造から、Mod の T 要素化の過程は 16 世紀初期に突然起こったのではなくむしろ段階的で、OE から中英語 (ME) にかけて Mod が補部に vP を選択する傾向が強まり、最終的に T に生起したと予測する。

本発表では、OE 期から ME 期にかけての VF 語順、VR 語順、VPR 語順の分布の変化を、史的電子コーパスを用いた調査結果を示しながら明らかにし、Nagata (2016) の理論的予測を検証する。

2. 「楽譜から読み取れる 16 世紀から 18 世紀の音節数の変化を伴う発音変化」

愛知県立芸術大学非常勤講師 榎山 陽子

近代英語期のイギリスの声楽曲については、歌詞の音符への割り当てられ方により用いられている語の音節数や強勢の位置等が分かるものがある。そこで、16 世紀から 18 世紀の曲集について検討し、語の音節数の変化などを調べた。例えば、動詞の-ed 形については、一般に元来-ed の e を発音していた形から e が削除され発音しない形へと変化したとされているが、語幹が母音で終わる語の一部については他の形のものとは異なり、16 世紀中頃まではほとんどが e を発音しない形であり、その後発音するものとしなくなるものと共存する状態になっている。本発表ではこのように楽譜から読み取れる変化について報告し、それらについて発音変化の視点から説明を試みる。

3. 「中英語・近代英語初期におけるクレオール語化におけるリズム構造 —OCP 制約による最適性理論の観点から—」

宮城教育大学教授 西原 哲雄

本発表では、中英語および、近代英語の初期において、当時の英語の構造が、ノルマン人の征服に基づいてフランス語化されたことによって、クレオール語化した英語である、クレオール英語(Creole English)であるという事実を実証したうえで、語彙の融合だけでなく、音韻的にも、一部、音節拍リズム(syllable-timed)をもった英語であったということ、最適性理論(Optimality Theory)とその制約である必異原則(Obligatory Contour Principle: CCP)の援用によって論証するものである。

また、当時の、そのようなリズム構造などの影響が、現代英語にも、一部反映されていることも指摘したい。

司会 広島修道大学教授 福元 広二

1. 「小説における知覚レベルの意識描写」

広島大学大学院生 重松 恵梨

意識には少なくとも知覚レベルと概念レベルの意識が存在する。文体論・物語論では、小説における意識描写の技巧として概念レベルの意識を表す自由間接思考(FIT)に焦点が当てられてきた。知覚レベルの意識描写の研究には、Fehr (1938)、Brinton (1980)、Pallarés-García (2012)等があるが、未だ知覚はFITの枠組みの中で論じられることが多く、上記先行研究においても知覚描写の歴史的変遷については論じられていない。

本研究ではケーススタディとして、小説勃興期の18世紀から意識小説全盛期の20世紀までの作家(Defoe、Austen、Dickens、Mansfield)を扱い、知覚描写の役割と技巧の(無)変化を考察する。具体的には、思考描写における直接/間接/自由間接思考の枠組みが知覚描写においても言語形式として存在するかを確認し、特に自由間接的な知覚描写の言語的特徴を分析する。

2. 「ディケンズの作品における慣用連語の独創性に関する一考察」

近畿大学准教授 西尾 美由紀

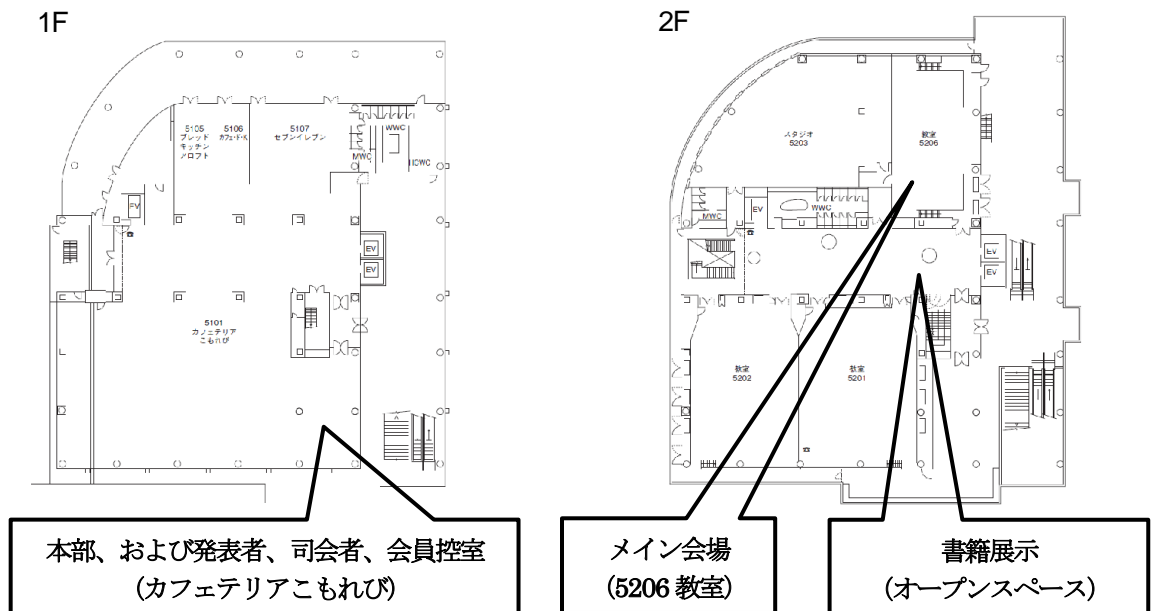
Gissing (1925) や山本 (1950) は、19世紀小説家チャールズ・ディケンズの作品には、イディオムや慣用表現が多く特徴的であると指摘している。イディオムやコロケーションを扱う際、その定義は研究者により様々である。Howarth (1998) によれば、イディオムは、それを構成する語句の結合の度合いにより、自由結合 (free combination)、制約的コロケーション (restricted collocation)、イディオムの主に3つの範疇に分けられる。これらは連続体として帯のようにつながっており、明確な境界があるわけではない。そこで、本研究では、ディケンズの作品におけるイディオムよりも広義である慣用連語の使用について記述し、作家の文体的特徴の一端を探ることを目的とする。

「イディオムと語義の変遷」

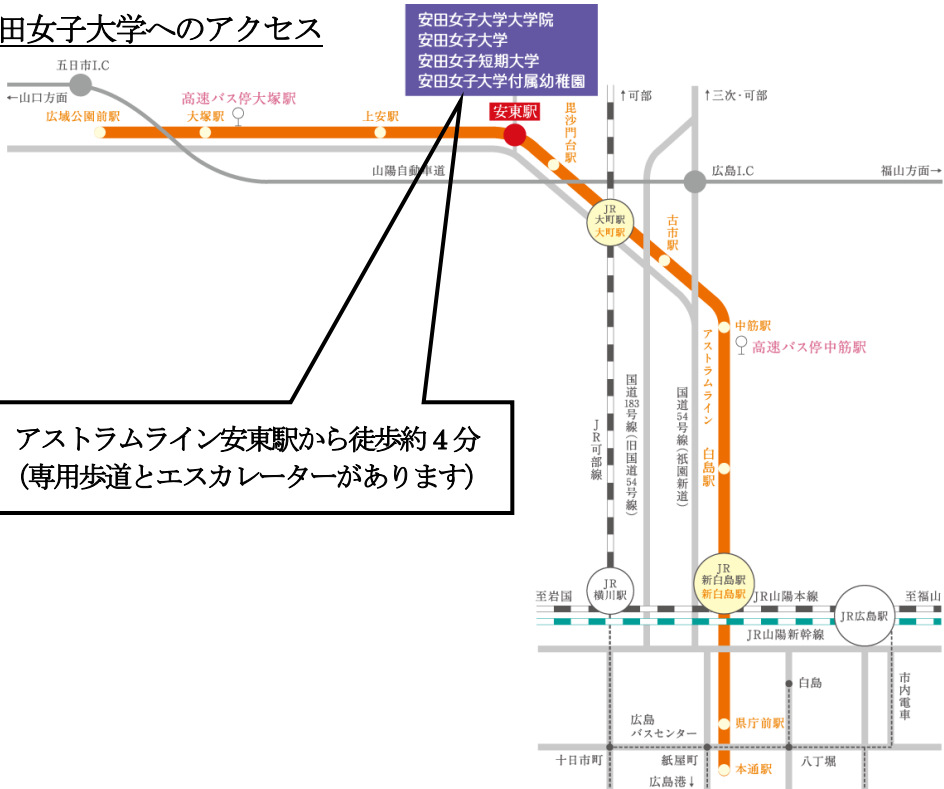
岡山理科大学教授 地村 彰之

語と語が構成する表現の意味が文字通りの内容を示すものから、段階的に徐々に元の意味を感じさせないものになっていくことを、その表現がイディオム化したと言う。文字通りまたは文字通りに近い意味で使われている表現が比喩的な意味になっている場合は語義が変遷したと考えられる。このようなプロセスが生じたと思われる近代英語期に焦点を合わせて、イディオムの形成過程を見ていく。まず、18世紀・19世紀英語コーパスを分析しながら、後期近代英語の実態を把握する。それぞれの用例について文脈を読みながら、個々のイディオムの微妙な意味を考える。なぜそのような意味合いで使われているかを検証するために、文字通りの意義で使われていたと想定される用例も考察する。中期英語は主としてチョーサー、初期近代英語はスペンサー、シェイクスピア、ミルトン、聖書の用例に見られる表現の変遷について取り扱う。

5号館平面図



安田女子大学へのアクセス



アストラムライン安東駅から徒歩約4分
(専用歩道とエスカレーターがあります)

キャンパスマップ

